

コミュニケーション・メディア・リアリティ      メディア変容の現象学に向けて  
Communication, Media and Reality : for Phenomenology of Social-Media-Change

張江洋直 (稚内北星学園大学)

目次

1. 現代社会論の確定    2項図式から3項図式へ
2. コミュニケーションの前景化    生産からコミュニケーションへ
3. シヤノン・モデルの狭隘性    主意的行為とコミュニケーション
4. マクルーハン・ルネッサンスの意義    メディア論の生成と技術決定論
5. 人工補完とメディア変容    おわりに代えて

1. 現代社会論の確定    2項図式から3項図式へ

社会学には「現代社会論(theories on modern society)」という独立した1つの研究領域がある。これは自明な事柄にみえるだろう。だが、現代社会の時代的な指標をどこに求めるかでその意味合いは決定的に異なるだろうし、概していえばA. コントもK. マルクスもM. ヴェーバーも、かれらが直面した 現代社会 を研究対象としたという意味では、そもそも社会学や社会理論そのものが現代社会論であるともいいうるだろう。だが、ここでは現代社会論にそうした広義の含意はなく、通常の範囲内で用いる。なお、私たちは、わが国でこの研究領域が制度化された時期を高度経済成長期という決定的な社会変動期を経た1970年代中葉にみている。

現代社会論の制度化の結果は、社会学でひろく用いられる歴史図式の転換によく現れている。概して初期社会学の歴史理解は、「前近代 近代」という単純な2項図式に定式化できる。そこでは近代社会が「産業(industry)」を中心に構想され、その批判もまた同じ機軸から描かれている。コントとマルクスはその典型といえるが、いずれにせよ、19世紀から20世紀中葉までの社会理論の揺籃はつねに「産業」から離脱することはなかったと概観できるだろう。

むろん、こうした確言にはすぐさま異論や反論が生じるだろう。というのも、「大衆社会(mass society)」の登場は初期近代との決定的な画期と捉えうるからである(張江・佐野 1997)。換言すれば、1930年代の「大衆社会論」の登場以降は社会学の歴史理解にとっては《過渡期》と位置づけられる。これが1970年代以降では、たとえ使用される名辞が異なる場合もあるにせよ、基本的には「前近代 近代 現代」という3項の歴史図式へと転換する。ちなみに、ここでいう《過渡期》の性質は、社会編成に関わる原理の並立という論理構成によく現れている。

実際にこの名辞を最初に用いたK. マンハイムは、「産業社会」の歴史的な展開過程に明確な合理性を認めつつ、同時に、大衆社会を近代とは異なる「現代社会」としてを 発見 する。

近代社会は、大規模な産業的社会としては、すべての衝動の充足を断念し抑圧することによって、その行為組織を最高度に予測しうるものとするが、他面大衆社会としては、無定形の人間集合に特徴的なあらゆる非合理性や激情的暴動をも産む。[Mannheim 1940=1962:73]

わが国における大衆社会論は、一方では「戦争責任」の問題にも関わり、フランクフルト学派とくにE. フロムの『自由からの逃走』[Fromm 1942=1951]に強く影響を受けつつも、他方ではD. リースマンの『孤独な群集』[Rieseman 1950=1964]の導入・受容とも関わり、高度経済成長期へと向かう1950年代から積極的に展開される。この著作の邦訳出版は1964年である。

周知のように、こうした大衆社会論の系譜、とくに後者はそのまま消費社会論へと連なる。この性向はひろく《生産から消費へ》と呼ばれてきたが、その代表的作品は 記号の消費 を論じたJ. ボードリヤールの『消費社会の神話と構造』[Baudrillard 1970=1979]であろう。この邦訳出版は1979年であり、ボードリヤールが多くの関心を集めたのは1970年代中葉以降から1980年代という、日

本社会が消費社会化を邁進する時期においてである。

他方、これに先立つ時期にわが国でも人々の耳目を集めたのが D・ベルの「脱産業社会 (post-industrial society)」論である [Bell 1973=1975]。ベルの議論は、1960年代を通じて先進社会が財の生産からサービスへとその経済的な中心を移行させ、産業社会 = 近代社会から情報や知識・サービスに社会的力点を置く脱産業社会へと離陸しようとしているというものである。ベル自身が「information society (情報社会)」という和製英語を用いるのは 1980年代以降のことではあるが、かれの議論は情報社会論の基本的な地平を拓く先駆であるとともに、そのもっとも重要なものの1つだといってよいだろう [張江 2003]。

さて、ここで注視したいのは、ボードリヤールやベルが明らかに「産業化」に代えて新たな社会編成原理を呈示することにある [大谷 2007]。つまり、ここに現代社会論が「大衆社会論」とは決定的に異なる仕方で、明確に1つの研究領域として確定したとみることができるだろう。

## 2. コミュニケーションの前景化 生産からコミュニケーションへ

しかし、私たちがここで捉えたいのは、こうした現代社会論の制度化の問題ではなく、ボードリヤールやベルの議論地平が共通に コミュニケーションの前景化 に関わる点である。周知のように前者では《モノの記号化》が焦点とされるので、この主張は首肯し易いだろうが、この論点はそこに限られるわけではない。たとえば、リースマンの「他人指向型パーソナリティ」をたんなる「消費」の問題系としてみるだけでなく、現代的には、むしろ「多元的な自己像」という議論地平を拓くものとしてより積極的に評価すべきである [浅野 2007]。そうであれば、そこからは「機械の時代の終焉 (the close of the mechanical age)」において問われる「多重人格」の問題系もそう遠くはないだろう [Stone, 1995=1999]。この点でいえば、リースマンの議論もまた コミュニケーションの前景化 の地平を準備したものとして捉えられるだろう。

また後者の場合では、すでに M・ポスターが、ベルにあっては情報が言語的事実としてではなく経済的事実として扱われていると適切な批判を行っている [Poster 1990=2001: 48]。これは正鵠を射ている。しかし、ベルの議論もまた、たしかにこうした不充足さは認められるにせよ、情報を「言語的事実」とする一歩手前、つまり、その理論地平を準備するものという意味で、やはり コミュニケーションの前景化 の議論地平を拓くものとして把握できるだろう。

ここでいう コミュニケーションの前景化 とは、たんにコミュニケーション過程そのものが大衆的な関心の中心となり前景化する事態を指すのではない。たとえば、A・ギデンズの「再帰的自己」 [Giddens, 1991=2005] を手がかりにして考えてみよう。ここでは、コミュニケーションの前景化 はあまり顕在的ではないとみえるかもしれない。というのも、リースマン的な自己論が自己の対他関係を焦点化するのに対して、ギデンズ的な自己論とは自己の対自関係に焦点を当て再構成されたものだからである。しかし、ギデンズがいう再帰的に創出される自己がまさに創出される機制の大前提となるのは、情報化された社会機構 何らかの社会的なコミュニケーション過程そのものの作動でもある。むしろギデンズ的な自己の創出機制は、単純な情報化というよりは、「脱埋め込み disembedding 機制」 [ibid.:19-25] と関連する。だが、この性向も、コミュニケーションの前景化 を欠いては成立不能であるのもまた確かなことだろう。

さて、以上の諸点を鳥瞰的に述べておけば、通常よく語られるような《生産から消費へ》ではなく、むしろ《生産からコミュニケーションへ》の転換が現代社会論の制度化の中軸に置かれていると考えるほうがより妥当性があるだろう。

ところで、こうした社会理論における コミュニケーションの前景化 の議論地平をそもそも拓いたのは N・ウィーナーのサイバネティクス (cybernetics) である。この点を明らかにするために、ウィーナーの翻訳者の一人でもある鎮目泰夫の解説を確認しよう。

communication という語も、.....人と人が何かを共に分け合うことを意味し、人と人、町と町との間の通信、交通、交易や、病気がうつることを指す.....。.....おそらくはウィーナーの著書『サイバネティクス 動物と機械における control と communication』が最大の転機になって、この英語は、人間間には限らない意味での情報(information)の伝達を指す言葉としても国際的に使われるようになってきた。[鎮目 1983: 159-160]

サイバネティクスが提起したコミュニケーションと制御(control)とを一体とするシステム論的な方向はベルにも明確に受け継がれる。だが、その後の情報社会論も含めてウィーナーの名はさほど問題とされず、実際、1980年代中葉にみられる《マクルーハン・ルネッサンス》が生じるまで、多くのコミュニケーション理論を一貫して支えるのはシャノン・モデルである。

ウィーナーは1954年の『人間機械論(The Human Use of Human Beings)』第2版でシャノン・モデルの提唱者である C.E.シャノンと W.ウィーヴァーの名を挙げて、次のようにいう。

私は、すでに、『サイバネティクス』と題する多少とも学術的な著書を書き、それは一九四八年に出版された。その思想を一般大衆にわかるようにしてくれといふかなり強い要望に答えて、私は『人間の人間的な利用』の第一版を一九五〇年に出版した。それ以来、この問題は、クロード・シャノン博士とウォレン・ウィーヴィー博士と私自身との共有するいくつかの観念から、一つの確立された研究分野へと成長した。[Wiener, 1954=1979:9]

情報のフィードバックによる自動制御という概念を基本にしたこの「一つの確立された研究分野」は、後に情報科学としてかたちを成すだけでなく、周知のように、ロボット工学や認知心理学、神経学、経済学、そして社会学など等、今日の多くの科学分野に影響を与えている。ウィーナーとシャノンとを関連づけて、両者の理論的要点を鎮目が語っている。

シャノンの情報理論は、雑音のある通信路を使って情報をいかに能率的かつ正確に(誤差なしに)送るかという問題の基礎を築いたが、ウィーナーの予測理論は、一面ではそれを裏返したみたいなもので、雑音のまざった信号の中から情報の現在の値や未来の値をいかにして推測するかという問題に関するものである。[鎮目 1983: 36]

いずれにせよ、ここで名前が挙がったウィーナーとシャノン、ウィーヴァー、そしてマクルーハン は、その後のコミュニケーション論さらにメディア論の画期をかたちづくっているだけでなく、社会理論における コミュニケーションの前景化 という性向の理論地平をも形成しているといえる。ちなみに、シャノン・モデルとマクルーハンのメディア論という2つの決定的な出来事は共に1960年代初頭に生じている。それらを順次みることにしたい。

### 3. シャノン・モデルの狭隘性 主意的行為者とコミュニケーション

シャノン・モデルとは、シャノンとウィーヴァーによって提唱されたコミュニケーション過程の数理モデルである。それは、「情報源・送信機・メッセージ・通信路・受信機・受信地」の6つの構成要素からなる[Shannon and Weaver 1964=1969: 46]。これらの構成要素は過不足なく配置され、しかも全体は簡素で単純でもある。つまり、それはモデルとしての要請を十分に満たしている。それもあり、1970年代中葉において、このモデルは「おそらく、もっとも影響力のあるコミュニケーション・モデル」[McQuail 1975=1979: 22]とみなされてきたのである。

だが、そこに決定的な2つの陥穽がある。第1は通信路=メディア観の問題だが、それはマクルーハンとの関連で後論に委ね、ここでは第2の問題点である狭隘性について確認したい。

シャノン・モデルの狭隘性とは、コミュニケーション過程を行為論的に捉えるときに明確になる問題系である。それゆえ、この問題点は、このモデルが固有にもつ欠陥とまではいいえないとみえるかもしれない。なぜならば、それは、このモデルを使用する側の問題であるともいえるからである。とはいえ、たとえそうであると仮定しても、少なくとも使用者に第2の問題点を誘発させる主因は、やはりこのモデル自体にあると確言しておかなければならないだろう。

というのも、D. マクウェールが指摘するように、この「数学的理論とは、人間でも、機械や別のシステムでも、どのような情報伝達の状況にも適用できる性質のもの」[*ibid.*, 22-23]とされるからである。むしろ、これは「情報科学」の基本思想である。

さて、シャノン・モデルの狭隘性を明らかにするために、ヴェーバーの行為類型論を手がかりにしよう。周知のように、それらは「目的合理的行為」「価値合理的行為」「感情的、特にエモーショナルな行為」「伝統的行為」という4つの理念型である[Weber, 1922=1972:39]。

ここで、これら4種類のなかで注視したいのは「目的合理的行為」である。この理念型にとって行為それ自体は「手段」である。そこでは如何に合理的に、つまり効率よく目的を達成させられるかが問題である。そのために、この理念的な行為者は「目的、手段、付随的結果に従って自分の行為の方向を定め、目的と手段、付随的結果と目的、更に諸目的相互まで合理的に比較秤量」[*ibid.* 41]することになる。つまり、この理念型は主意的(voluntary)である。

この理念型のどこが問題とつながるのだろうか。じつは、シャノン・モデルは行為論的視角からみるかぎり、この「目的合理的行為」にしか妥当しない。これが狭隘性の内実である。

まず留意すべきは、シャノン・モデルがもつ前提事項である。竹内郁郎によれば、シャノン・モデルははじめから工学的コミュニケーションを念頭に置いているために、「送信機」および「受信機」のはたらきを、すでに言葉や文字や絵などのかたちで記号化されているメッセージを電流や電磁波の信号に変換すること(および信号をメッセージ記号に復元すること)に限定している[竹内 1973:107]。それゆえ、そこでは「送信機」にとってメッセージは所与のもの[*ibid.*]とされる。こうした前提は、さきに鎮目の解説にみたように、シャノン・モデルにとっては「雑音のある通信路を使って情報をいかに能率的かつ正確に(誤差なしに)送るか」に関心が焦点化されている以上、当然のことといえてよいだろう。

たしかに、この関心の領域にあっては「メッセージ」は所与とされてしかるべきであるし、「記号化されているメッセージ」も様態としては所与であろう。さらにいえば、そこで想定されているコミュニケーション過程がこの記号化された所与のメッセージを「受信地」に「能率的かつ正確に」送り届けるという目的を前提とする、つまり、この目的に基づいて構成されることも妥当なものだといえるだろう。

しかし、こうした妥当性はすべてシャノン・モデルが成立する関心の範囲内においてに過ぎない。つまり、このモデルの妥当性はあくまでもこの関心の範囲内に限定されなければならない、それをあたかも「人間でも、機械や別のシステムでも、どのような情報伝達の状況にも適用できる性質のもの」といった主張は、あえていえば誇大宣伝とさえいいえるだろう。

なぜこうした事態を招来してしまうのかといえば、このモデルの考案者たちが自らの前提を暗黙裡にしたまま、その吟味を不問に付しているからである。換言すれば、シャノン・モデルは《すでに記号化されているメッセージを所与として、それを能率的かつ正確に受信地に送信する》場合にのみ妥当するのであって、それ以外の行為類型のモデルとしては成立不能である。

では、このモデルを社会的コミュニケーション分析において使用する場合はどうだろうか。たとえば竹内は幾つかの修正案を吟味しつつ、独自の修正モデルを呈示する。それは「送信機」と「受信機」および「通信路」=メディアに修正を施し、それぞれを「記号化」「記号読解」「チャンネル」へと変換するものである[竹内 1973:107]。これによってコミュニケーション過程は「発信体」「記号化(体)」「メッセージ」「チャンネル」「受信体」「記号読解体」[竹内 *ibid.*, 106; 1997:4]の6つの

要素から構成されることになる。

私たちがみるかぎり、この変形の要諦は一貫して行為主体の選択に関わる問題に収斂する。つまり、それは最終的には《人間的な自由》を含意し、むしろ、その方向は妥当なものだろう。だが、暗黙の内に、つまり明確な分析的な手続きを経ずに《自由》は《意志》へと変換される。こうして修正シャノン・モデルもまた同様に、主意的で狭隘なコミュニケーション類型という陥穽へと入り込んでしまう。

さらにこうした問題点をより本質的にいえば、こうした了解を可能とする、あるいはそのように強いる当のものは、数理モデルを無限定的にコミュニケーション過程の一般モデルとする了解を暗黙裡に可能とさせる 科学主義的な認識空間 そのものであり、さらに、それがポリティカルに作動することへの等閑視であろう。それを端的にいえば、自然科学と社会科学との 棲み分けの心性 といってよいだろう[張江 2004]。

いずれにせよここでは、シャノン・モデルがコミュニケーション研究の安定した基準値として君臨した事態を分析するには、関心がそれに相関する領域 それが物質的であれ観念的であれ、関心に相関する「限定的な意味領域(finite provinces of meaning)」[Schutz,1962 = 1985 : 38]と対応するという現象学的な志向性分析の基本枠組みが必須であることを確認するに留めたい。

#### 4. マクルーハン・ルネッサンスの意義 メディア論の生成と技術決定論

1960年代にマスメディアに登場するマクルーハンは、まさに時代の寵児であり、その影響力は研究者集団の域を超えた1つの社会現象と呼ぶものだろう。それが、1970年代への推移とともに「死んだ犬」のごとき扱いを受け、1980年代中葉以降の《マクルーハン・ルネッサンス》が生じるまで、かれは現代社会論の視界から完全に消失する。

じつは、かれが 再発見 されるまでの期間とは、電子メディアという新しい技術に誘発された「官庁や財界、メディア業界のポリティカルな力学のなかから噴出し、研究者もまたその議論のステージに便乗することでとりざたされた」[氷越 1993 : 58]ニュー・メディア論の時代である。そこにおいて、「電子的な情報通信技術の高度化と社会の関係をめぐる議論……の焦点は……新しい電子情報通信メディアが社会にもたらすであろう新たな便益をめぐる未来像の構築に据えられていた」[若林 1993 : 46]。

つまり、《マクルーハン・ルネッサンス》とは、こうした新技術に触発された未来学的視角から脱し、メディア論的視角が生成する物語の象徴的な出来事なのである。

さて、こうしたマクルーハンの 認識 - 言説空間 における落差に関してはすでに別稿で少し論じてあるが[張江 2003 ; 2004]、ここではさらに、その主因を、相互に関連する3つの指標に即して分析したい。それらの第1を「時代性」、第2を「コミュニケーション研究の暗黙の人間像」、そして第3を「メディア論という問題系」と呼んでおきたいとおもう。

第1は比較的単純な論点であり、時代性とは1960年代～1970年代を指す。この落差の一員は、テレビや電話といった電気メディアの大衆的な普及によって、マクルーハンの過剰ともいえる楽観主義が大衆的な信憑性と決定的な齟齬を来したことにあろう。またこの時期の電子メディアの可能性は大衆的な準位では未だ皆無であり、コンピュータ・コミュニケーションはアメリカ西部のサブ・カルチャーないしはカウンター・カルチャーの域をでるものではなかった。

第2は、さきにみたシャノン・モデルが暗黙裡に主意的人間像を前提にしていることに端的に現れている。これは、当時のコミュニケーション研究の圧倒的な中心がマスメディア研究であったこととも関連する。マスメディア研究であれば、送信者にすでに一定の意図が存すること自体は自明な所与的な事柄である。それゆえ問題は「受信者」に焦点化されるわけだが、ここで指南力を発揮するのは大衆社会論的な視角 《主意的な人間像からの凋落態としての大衆》という論点であって、決してメディア論のものではない。しかも、それだけではなく、そこでは「メディア」がマス

メディアの記号論的な有徴として機能していたのであって、そのバイアスが解かれるには、若林幹夫が逆転した表現で定式化する《ニュー・メディア論からメディア論へ》という知的視角の決定的な転換を必要としたのである[若林 1993:46]。

ちなみに、こうした主意的人間像をモデルとするかぎり、メディアはたんなる「通信路」として安定的に、つまり何ら分析の対象となることもなく所与として措定されるか、あるいはより実質的に、主体の選択の問題を含意する「チャンネル(channel)」と名称変更を施されるしかないだろう。しかし後者もまた、その内実は「通信路」であることに変わりはない。

第3は、マクルーハンが語った「メディアはメッセージである」[McLuhan 1964=1987:14]という命題に象徴される。ここでは、メディアは情報のたんなる「通信路」ではない。つまり、この命題は、「メディアそのものが、それが運ぶメッセージとは独立にもっている……人間の経験と関係を構造化する力を言い表したもの」[浜 1996:98]と捉えうるだろう。換言すれば、マクルーハン理論にはたんにメディアという経験の領域を問うだけではなく、さらに人間経験の可能性の条件としてメディア性を問う理論的な方向性を見ることができると[張江 1999]。

だが、それは端緒としての方向性であるに過ぎない。この点を簡略に確認しよう。

技術とはある種の知を別の様式に移し変える方法である。……メディアの力が経験を新しい形式に転換するのを見れば、いっさいのメディアが活発なメタファーであるといえる。話されたことばは人間の最初の技術であった。……ことばは一種の情報検索の道具であって、人間の環境と経験の全体に高速度で及ぶものだ。ことばはメタファーとシンボルの複雑なシステムであって……外化の技術である。……この電気の時代に……人間は、ますます情報の形式に移し換えられ、技術による意識の拡張を目ざしている。……われわれは、拡張された神経組織……、電気のメディアを用いることによって、一つの動的状態を打ち立てた。それによって、これまでの、手、足、歯、体熱調節器官の拡張にすぎなかった技術が……すべて情報システムに移し換えられるであろう。[McLuhan 1964=1987:59-60]

マクルーハンが語るメディアとは「われわれ自身の拡張したもののこと」であり、それは「新しい技術」[*ibid.*:7]を意味する。「衣服は皮膚の拡張であり」[*ibid.*:120]、「機械化」とは「人間の外なる自然あるいは人間の内なる本性を、増幅させ特殊化した形式に移し変えたものに他ならない」[*ibid.*:59]。簡略に言えば、かれの「メディア論は、メディアの技術的な変化がそのまま人間自体を変化させるという発想」であり、「道具が手の延長であるように、活字メディアも電子メディアも、人間の延長だという」[小阪 2000:31]ことになる。

## 5. 人工補完とメディア変容 おわりに代えて

かつて私たちは、マクルーハンによる、このアナロジーに依存した短絡的な思考を「そこで問うべき課題を暗喩的修辞法で飛び越えてしまうことで、結局は技術決定論の域を一步もでてはいない」[張江 2003:14]と論定した。この確定は妥当なものだが、しかしさらに附言して、問うべき問題系はより深刻であると修正しなければならないだろう。というのも、マクルーハンによるアナロジカルな技術決定論の内実をこそ、現在の問わなければならないからである。

それをA. R. ストーンに倣い「人工補完(prosthetic/prosthesis)」[Stone, 1995=1999]と呼んでおこう。これは、元来は医療の一分野である「補綴学(prosthetics)」で義歯や義足など等の人工物で身体的な機能を補完することおよび、その用具を指すことばである。それゆえ、「われわれ自身の拡張したもののこと」を指すマクルーハンのメディア観はそのまま人工補完と全的に重複する。かれのメディア論において、衣服、車輪、自転車、自動車といったアイテムも印刷、新聞、電信、電話、ラジオ、テレビなどとまったくの同一地平に置かれるのはそのためである。

つまり、マクルーハンのアナロジーはこの人工補完と身体とを同値する。たしかに私たちは、盲人の杖が地面の微細な凹凸を感受するのを知るとき、そこに身体の拡張をみることができる。そこで人工補完=杖は身体化されている。むろん、これは典型例であって、特殊事例ではない。人工補完は私たちの日常生活に多層に存在し、多くが身体化されて作動している。否、むしろ、私たちの日常生活は人工補完なしには成立しないというべきだろう。かつてはたんなる夢想であったウェアラブルコンピュータや移動体通信(携帯電話)、インターネット……など等、そのどれもが「小型化」という名辞で身体化を志向され、それが次々に実現され普及している。

こうした現況を目の当たりにして、たとえば身体的本性=自然性を措定しておいて、それを墨守すべきだと主張するつもりはない。だが、人工補完が身体と全的に同値されるとすれば、それは明らかな誤謬である。何が問われなければならないのだろうか。

マクルーハンのメディア論は、技術を徹底して 人間的な諸経験との相関 の内に捉えようとする視点で貫かれている。それはいまなお重要なものだろう(張江 2003)。だが、それが時間軸においてどの準位のものであるのか、これがつねに明示化され、対象化されるのでなければならないだろう。換言すれば、ここで問われているのは《類と個》という古い問題系である。

とはいえ、それをそのままの問いの形式で問うべきではないだろう。しかし、こういったからといって、私たちはここで、この問題系を擬似問題だといいたいのではない。そうではなく、《類と個》が相互主観的な理念化の産物であることを見据え、それゆえ、《類的な時間性》をたんに理念的な抽象態 とするのではなく、それが私たちの日常生活の世界において多層的な人工補完の意味層の 沈殿(sedimentation) として存立することを捉えるのでなければならないだろう。このときに、身体化あるいは 生きられる という動的な把握が鍵になるだろう。

さて、最後に、現在の問題とすべき論点を明記して本報告を終えたいとおもう。《マクルーハン・ルネッサンス》の意義を継承するとは、つまり、少なくともマクルーハン理論から現在の把握すべき論点とは、かれの無邪気なアナロジーを私たちの現況と心性とに対比させ、自らが生きる 融合 を明確に把握することにある。それは、人工補完と身体との 融合 を一方では、必然として積極的に認めつつ、同時に他方で、この融合関係をいわば 脱構築 することの個別具体的な模索でもあろう。例示として「脳死問題」挙げておきたい(張江 2000b)。

端的にいうと、生命維持装置につながれたドナーという 死体であって、同時に人工補完の素材でもあるカテゴリーをグロテスクなものとするのか、あるいは、それを科学=医療の進歩として賞賛するのか、この二者択一を問題にするだけでなく、《生きられた脱構築》という個別具体的な、個々人によって生きられる謂わば 第3の途 が考えられなければならないとおもう。

#### 参考文献

- 浅野智彦 2007(近刊) 「自己を社会的にみる」, 張江洋直・大谷栄一編『ソシオロジカル・スタディーズ』世界思想社.
- Baudrillard, J. 1970 *La Societe de Consommation*, Galimard.=1979, 今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造』紀伊國屋書店.
- Bell, D. 1974, *The Coming of Post-Industrial Society*, Basic Books. = 1975, 内田忠夫ほか訳『脱工業化社会の到来』上・下, ダイヤモンド社.
- Fromm, E. 1942 *Escape from Freedom*, Rinehart.=1951, 日高六郎訳『自由からの逃走』創元社.
- Giddens, Anthony, 1990, *The Consequences of Modernity*, Polity Press. = 1993, 松尾精文・小幡正敏訳『近代はいかなる時代か?? モダニティの帰結』而立書房.)
- Giddens, A. 1991, *Modernity and Self-Identity: self and society in the late modern age*, Polity Press.= 2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社.)
- 浜 日出夫 1993 「マクルーハンの銀河系」『情況』1993年7月号、情況出版.

- 浜 日出夫 1996 「マクレーハンとグールド」『メディアと情報化の社会学』岩波書店。
- 張江洋直 1999 「経験とメディア」『稚内北星学園短期大学紀要』第12号。
- 張江洋直 2000a 「リアリティとメディア」丸山不二夫編『情報メディア論』八千代出版。
- 張江洋直 2000b 「死生論と世界の超越」『情況』2000年8月号、情況出版。
- 張江洋直 2001 「メディア変容とマス・リテラシー」『稚内北星学園大学紀要』第1号。
- 張江洋直 2002 「奇妙な棲み分けの背後へ」『年報社会科学基礎論研究』第1号 ハーベスト社。
- 張江洋直 2003 「情報社会論の存立機制」『稚内北星学園大学紀要』第3号。
- 張江洋直 2004 「情報社会の夢と現実」, 西原和久・宇都宮京子編『クリティークとしての社会学』東信堂。
- 張江洋直・佐野正彦 1997 「現代社会学と社会学の焦点」, 張江洋直・井出裕久・佐野正彦編『ソシオロジカル・クエスト』白蔞社。
- 小阪修平 2000 『現代社会のゆくえ』彩流社。
- Manheim, Karl 1940 *Man and Society: In an Age of Reconstruction*, Routledge & Kegan Paul, London. = 1962, 福武直訳『変革期における人間と社会』みすず書房。
- McLuhan, Marshall, 1962, *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*, Toronto University of Toronto Press. (= 1986, 森常治訳『グーテンベルクの銀河系?? 活字人間の形成』みすず書房。
- McLuhan M. 1964 *Understanding Media*, McGraw-Hill. = 1987, 栗原裕・河本仲聖訳『メディア論』みすず書房。
- McQuail D. 1975 *Communication*, Longman Group Limited. = 1979, 武市英雄ほか訳『コミュニケーションの社会学』川島書店。
- 水越 伸 1993 「メディア論の混沌」『情況』1993年7月号、情況出版。
- 村上陽一郎 1999 「日本社会と情報化」『情報の空間学』NTT出版。
- 大谷栄一 2007 (近刊) 「「現代社会」はどのような社会か?」, 『ソシオロジカル・スタディーズ』所収。
- M. Poster, 1990, *The Mode of Information*, Cambridge Polity Press. = 1991, 室井尚・吉岡洋訳『情報様式論』岩波書店。
- Riesman, D. 1950 *The Lonely Crowd: A Study the Changing American Character*, Yale University Press, New Haven. = 1964, 加藤秀俊訳『孤独な群集』みすず書房。
- Schannon, C.E. & Weaver, W., 1964, *The Mathematical Theory of Communication*, Univ. of Illinois Press. = 1969, 長谷川淳・井上光洋訳『コミュニケーションの数学的理論』明治図書。
- Schutz, A. 1962 *Collected Papers I*, Nijhoff. = 1983 渡部光・那須壽・西原和久訳『シュッツ著作集』第1巻、マルジュ社: 1985 渡部光・那須壽・西原和久訳『シュッツ著作集』第2巻、マルジュ社。
- Stone, A. R. 1995 *The War of Desire and Technology at the Close of the Mechanical Age*, The MIT Press. = 1999, 半田智久・加藤久枝訳『電子メディア時代の多重人格』新曜社。
- 鎮目恭夫 1983 『ウィーナー』岩波書店。
- 竹内郁郎 1973 「社会的コミュニケーションの構造」, 内川芳美・岡部慶三・竹内郁郎・辻村明編『現代の社会とコミュニケーション 1 基礎理論』東大出版会。
- 竹内郁郎 1977 「社会的コミュニケーションとは何か」山根常男ほか編『テキストブック社会学6 マス・コミュニケーション』有斐閣。
- 田崎篤朗・船津衛 1997 『情報社会論の展開』北樹出版。
- 若林幹夫 1993 「メディアと社会変容」『情況』1993年7月号、情況出版。
- Weber, M. 1922 "Siziologische Grundbegriffe" in *Wirtschaft und Gesellschaft*, Tübingen, J.C.B. Mohr. = 1972, 清水幾太郎訳『社会学の根本問題』岩波文庫。
- Webster, F. 1995 *Theories of The Information Society*, Routledge. = 2001, 田畑暁生訳『「情報社会」を読む』青土社。
- Wiener, N. 1954, *The Human Use of Human Beings*, 2<sup>nd</sup>. ed., Houghton Mifflin. = 1979, 鎮目恭夫・池原止戈夫『人間機械論』みすず書房。